

2023年度の研究活動

総合医学研究所の達成目標の1つである“学内外への広報や若手研究者の育成、医科学分野に関連した他の学部や研究機関との連携”を目的に研修会(12月)、公開研究報告会(3月)、新聞紙上での座談会(6月)を開催しました。これらの研究活動は、学内の医、理、工、農、海洋、生物の各学部をはじめ、スポーツ医科学研究所や先進生命科学研究所、マイクロ・ナノ研究開発センターなど、幅広い分野の研究者に交流の場を提供しています。

第19回研修会(「松前記念講堂」2023.12.16) 総合医学研究所とマイクロ・ナノ研究開発センターが共同開催

今年度も引き続き、マイクロ・ナノ研究開発センターとの連携強化を目的に共同開催としました。WEBビデオ会議システム「Zoom」を併用し、医学部、工学部、理学部の教員や学生、大学院生、生命科学統合支援センターの職員ら約90名が参加して活発にディスカッションが行われました。この取り組みは、若手研究者にとって東海大学各学部を横断する幅広い学術的交流の機会となり、研究の裾野を広げる東海大学の活性化に繋がっています。

今回は特別講演として、大阪大学微生物病研究所の石谷 太教授が、「魚が切り拓く先制医療研究」をテーマに特別講演。ゼブラフィッシュを用いた腫瘍発生メカニズムの解明や老化制御因子の探索に関する研究成果を紹介しました。

大学院生や若手研究者13名によるショートプレゼンテーションも実施され、参加者の投票により優秀発表者3名を「ショートプレゼンテーション・アワード」として表彰しました。

< ショートプレゼンテーション・アワード受賞者 >

1位:白井大喜(工学研究科機械工学専攻修士2年)

「精子形成機序解明に向けた精巣培養ライブイメージング用システムの開発」

2位:内田 頼(工学研究科応用理化学専攻修士1年)

「撥水性ナノ薄膜の大量調製法の確立とカバーガラスフリー生体深部イメージング」

3位:椿 翔吾(医学部医学科4年生)

「消化管内共生病原菌Klebsiella pneumoniaeの菌体外膜微粒子が送達するsmall RNAによる宿主免疫攪乱」



2023年度の取り組み

座談会(「伊勢原校舎」2023.6.13) 「腸内細菌が宿主の病態に与える影響」

総合医学研究所では故猪子元所長らの貢献によってヒトの全ゲノムが解析された2000年以降ゲノムと創薬を融合させた研究を積極的に進めてきました。宮田元所長と平山令明先生が中心となって開発された腎臓病治療薬などの多くの成果も上げています。

今回は、森正樹所長(医学部長)と永田栄一郎教授、中川草准教授、津川仁講師、今井仁講師が参加。今井講師が司会を務め、「腸内細菌が宿主の病態に与える影響」をテーマに研究の現状や展望について語り合いました。

アカデミアにおける研究では、ハイレベルの科学的知識と技術力、“患者さんを救う”という意識の高さに加え、実行力が何よりも重要です。本研究所の研究者達はそうした4つのファクターを満たしているからこそ、研究の進展があります。今後も長期的視野に立ち、腰を据えた研究開発を進めていきたいと語られました。



第27回公開研究報告会(「伊勢原校舎」2024.3.12)

「再生医学」「ゲノム医学」「創薬」「血液・腫瘍学」「肝臓・腎臓病学」の5部門の所員が1年間の研究成果を報告します。初めに森正樹所長(副学長・医系担当、医学部長)が登壇。「本学が誇る卓越した研究者から、医学研究を牽引する成果を聞ける機会です。活発な議論を期待しています。」とあいさつしました。

今年度のコアプロジェクト「T細胞の初期発生を誘導するNotchシグナルの解明」(細川准教授)の報告を含む6テーマについて所員が研究成果を報告。各発表後には、今後の展開や臨床への応用などについて活発な質疑応答や意見交換を行いました。最後に松阪泰二次長(基礎医学系生体機能学領域教授)が、「来年度は5つの部門を再編し、新しい体制でスタートします。医学・医療のさらなる充実に向けて所員がさらに連携を深めるとともに、学内外との共同研究を推進していきましょう」と結びました。

ディスカッションによって研究を深めていくのも本報告会の目的です。研究の方向性や共同研究の可能性、臨床への応用などについて、活発に議論する良い機会でもあります。自身の研究が講演者の研究とどう繋がるかを考え、情報を交換して、より多くの共同研究が進められることを期待しています。